

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

内山完造批評文集 両辺倒

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

内山完造批評文集

**両辺倒** りゃんぺんとう

中国人的政治・経済感覚の古層

書肆心水

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

目次

内山完造著『生ける支那の姿』への序文……………魯迅 二

\*

両辺倒（りやんべんとう）……………二六

日本人と中国人と……………一九

スガ眼がくせ者……………二三

不敗の方法……………二六

理解の難しさ……………三三

外交の妙……………三六

民族魂……………四〇

中国人と時間……………四四

現実に立つことだ……………四九

相対的考え方……………五二

主観と客観……………五六

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

小買が割安	六二
人柄が値になる	六七
木と竹	七二
礼を云うと親切が消える	七六
針の先と拳骨	八一
相対性	八五
単純と複雑	八八
天命を待つのだ	九三
二本建てだ	一〇〇
踏み込んだ一足	一〇四
好人は兵にはならん	一〇八
説明の簡易化	一一一
中国共産党と中国人	一一五
島には根がある	一二五
中国式	一三一
幫 <small>バン</small> の一つ	一三八

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

残飯	一四三
も一つの残飯	一四七
行詰りが無い話	一五〇
人民裁判	一五六
彼等は大人だ	一六〇
平均有銭人	一六四
円満具足	一六八
多数主体	一七三
錬れた人間だ	一七七
結論	一八一
倒れた官僚	一八七
寄生虫の話	一九三
化石的ではない	二〇〇
先ず満腹せしめよ	二〇六
私の疑問	二一一
偶然漫語	二二七

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

中国の教科書	二二三
生命と権利	二三一
三つの根性	二三四
同文の悲哀	二三七
光榮之人	二四一
驚嘆に値いする	二四五
無意識から意識へ	二五三
一金とは何のことか	二五七
頭が下る	二六三
再び誤ることなかれ	二七〇
理解ある家主	二七四
約束について	二七七
*	
(附録) 上海内山書店	二八一

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

内山完造批評文集

両<sup>り</sup>辺<sup>べん</sup>  
倒<sup>とう</sup>

中国人的政治・経済感覚の古層

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 凡例

一、本書は、内山完造の数多ある批評的エッセーのなかから「中国人的政治・経済感覚の古層」をめぐる話を選出して書肆心水が一書にまとめたものである。収録した文章は、『両辺倒』および『生ける支那の姿』、『平均有銭』、『そんなへえ・おおへえ』から選ばれている。さらに、巻頭に『生ける支那の姿』に寄せられた魯迅の序文を収め、巻末には附録として内山の自己紹介といった趣きの「上海内山書店」を収めた。

一、底本の刊行年と刊行所は次のとおり。

『生ける支那の姿』一九三五年・学芸書院

『そんなへえ・おおへえ』一九四九年・岩波書店

『両辺倒』一九五三年・靛元社

『平均有銭』一九五五年・同文館

収録した各文章の末尾に出所書籍名の略号としてそれぞれ「生」「そ」「両」「平」のいずれかを記した。

一、本書は新漢字標準字体、新仮名遣いで表記した。「廿」は旧漢字ではないが例外的に「二十」に置き換えて表記した。

一、現今一般に漢字表記が避けられているものは平仮名表記に置き換えた（例、其れ↓それ、

屢々↓しばしば)。

一、現今一般に仮名ではなく漢字で表記するものは漢字表記に置き換えた。漢字表記が二通りある場合には一般的なほうで表記した(例、りくつ↓理屈、りやく奪↓略奪)。

一、送り仮名は現今一般の感覚でその過不足を加減した。

一、読み仮名ルビを適宜附加した。ただし読みが複数ある場合には読み仮名の附加を避けた

(例、彼方此方、此奴、定る)。

一、踊り字(繰り返し記号)は「々」のみを使用した。

一、句読点を加減したところがある。また読点を句点に、句点を読点に変えたところがある。

一、書名は「」ではなく『』で括った。

一、本書刊行所による註釈は( )括りの二行割註で表記した。

一、本書にまとめるうえで表記統一したものがある(例、…カ月／…ヶ月、アジャ／アジア)。

一、正誤を判断しかねる場合などに「原文のまま」の意味で記す「ママ」のルビ書きは、( )で括って(ママ)と表記した。

SAMPLE  
Shoshi-Shinsu.com

内山完造著 『生ける支那の姿』への序文

魯迅

これも自分の発見でなく内山書店で漫談を聞いて居たときに拾ったものだが日本人程結論を好む民族、即ち議論を聞こうが本を読もうが、もし遂に結論を得なかつたらどうしても気がすまない民族は、今の世の中に頗る少ないらしいと云うことである。

この結論を先に受け入れると時々成程と考えさせられる事がある。例えば支那人についてもそうである。明治時代の支那研究の結論は大抵英国の何とか云う人の書いた『支那人の氣質』の結論に影響されたものが多かったらしいが、近頃になって面目一新の結論も出て来た。或る旅行者が退隠した金持ちの大官の書齋に這入って、とても価値の高い硯を沢山持って居った所を見てから支那は文雅な国だと云い、又或る観察者はちよつと上海まで出掛けて猥褻本や絵を二、三種買込み、変な見世物を採し出して支那はエロ

『生ける支那の姿』序文

チックな国だと云う。江蘇や浙江あたりの人々が竹の子を盛んに食って居る事までもエロチックな心理の表現の一証拠として数え上げられる。ところが広東や北京などには竹が少ないから竹の子をそう盛んに喰わない。貧乏文士の家か下宿に行けば書齋と云う部屋がないばかりか硯も一つ二十銭位の代物を使って居る。そんな事を見ると今迄の結論は通じなくなるから観察者も少々困って別に何か適当な結論を摘み出さなければならぬ。そうして今度はどうも支那は中々わかりにくい、支那は謎の国だと云う。

自分の考えでは地位、殊に利害さえ違えば国と国との間は云うまでもなく、同国人の間でも相互に瞭解しにくいのである。

例えば支那から西洋へ留学生を沢山派遣したその中の或る先生は西洋研究もそう好かないと見えて、遂に支那文学に就いて何とか云う論文を提出して、向こうの学者達を大いにびっくりさして博士の肩書を貰って帰った。

けれども余り長く外国で勉強して居ったために支那のことは大方忘れて仕舞うたが帰国すると西洋文学を教授しなければならぬことになった。そうして自国に乞食の多い所を見て大いに不思議がって、彼等はどうして学問を勉強しないで自ら墮落に甘んじてるのだろうか、だから下等な人間は実に救うべからざるものだと慨歎した。

しかしそれは極端な例である。もしも永く或る土地に生活し、その土地の人民に接触して殊にその人民の魂にふれ、且つそれを感得して真面目に考えて見れば、その国を瞭解することはあながち出来ないこともあるまい。

著者は二十年以上も支那に生活し各地方に旅行し各階級の人々と接触したのだからこんな漫文を書くには実に適当な人物であると思う。論より証拠、その漫文も確かに一異彩を放って居るではないか。自分も時々漫談を聞きに行くから実はほめたてる権利と義務とをもって居るが、しかしもう長い間の「老朋友」であるから悪口も少々書き添えて置きたい。その一は支那の優點らしいものをあまりに多く話す趣きがあるので、それは自分の考えと反対するのである。だが一方著者自身の或る考えでやるのだから仕方がない。もう一つは悪口と言えないかも知れないが即ちその漫談を読めば成程と思わせる点は頗る時々出て来る。それも大いによいことではあるが、その成程と思わせる処は詰る処やはり結論なので幸い巻末に「第何章 結論」と銘打って居るものがないから、やはり漫談にとどまって居るのでよかった。

しかしいくら漫談だと云っても著者はやはり支那の一部分の真相を日本の読者に紹介するつもりである。が、今の処では依然として色々な読者によって、結果が違うであろ

『生ける支那の姿』序文

う。それは仕方がない。自分の考えでは日本と支那との人々の間はきつと相互にはつきりと瞭解する日が来ると思う。昨今新聞には又盛んに「親善」とか「提携」とか書き立てて居るが、来年になったら又どんな文字をならべるか知らんけれども、とにかく今はその時でないのである。

むしろ漫文でも読む方が面白いだろう。

一九三五年 上海にて

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 両 辺 倒

(りゃんべんとう)

「活仏」とはいきぼとけのことである。「活人」とはいきている人のことである。しかし「活字」とはいきてる字ということになる。と今さらのように感心するのは恐らく私一人だけかとも思うが、かの体軀極めて矮小なる「活字」が時を得て人々に目見えんか、易々として七千万人を喜怒哀楽せしめ、杞憂せしめ、心配せしめ、捕らぬ狸の皮算用までせしめるのである。世の中の流行というようなことぐらひは誠に朝飯前のことである。ああ偉大なるかな「活字」の活力、汝はまさに現代の一大怪物であると誰でも気がつくことでありながら、またしてもその怪力にひきずりまわされるのが現代文化人の特色とでもいうのであろう。

最近の流行語に「一辺倒」というのがある。なんでも中華人民共和国政府主席毛沢東先生が第一発言者であって、第二か第三か、あるいは第九か知らぬが、わが日本国政府

SAMPLE  
Shosui.com

両 辺 倒

の総理大臣吉田茂先生も右にならってお使いになったということである。一体「一辺倒」とはどんな意味であろうかと聞いて見たり探して見たりしたが、古い言葉ではないらしい。恐らくは毛沢東先生の発明らしい。毛沢東先生は「向蘇一辺倒」といわれたというから、この意味は現在の世界に流れている二つの大きな思潮の一つであるソ連共産主義に一辺倒せよ（一方へもたれる、一方に偏る）、一億一心、一億火の玉的といわれたのであることは誰にでもわかる。そこには言外に、今日の世界においてはこの二大潮流の外に中立するなどということとはできないということも読まれるが、また一つ、中華人民共和国政府は実際に共産党と民主同盟等十六派の連合政府である関係から、現実の政治（公私兼顧、労資両利）についてもいろいろと意見があつてなかなか一致するに困る。そこで政治の現実においては、公私兼顧、労資両利（新民主主義）に一辺倒せよということも含まれているように思えるのである。しかもそれはまことに当然のように思われる。なぜなら、われわれ日本人のように、言われぬ前から一方に偏るくせのある国では実は必要のない言葉であるが、中国人のようになんでも「二本建て」の人間なるがゆえに発言されたのであると私は思う。毛沢東先生は「向蘇一辺倒」と叫んでモスクワで堂々と中ソ同盟条約を結ばれた。これでこの言葉は立派に実行されたのである。この言

葉の意味は、これではつきりとなったのである。翻って考えるに、現在台湾に在る華民国国民政府主席である蔣介石先生も、無論言葉は違うが同じく一辺倒を叫んでおられるのである。それは内は三民主義一辺倒、外は向美一辺倒ということである。これで中国には毛先生の向蘇一辺倒と蔣先生の向美一辺倒と二つの一辺倒があることになると思ふのである。かつての大戦中に抗戦政策の重慶の国民政府（蔣介石主席）と和平政策の南京の国民政府（汪兆銘主席、後に偽政府といわれた）と二つの国民政府ができたことがあった。私のいう「二本建て」である。断つて置くが「中庸」とは違ふ。中庸は不冷不熱であるが、二本建ては「冷」と「熱」とである。そして中国は安全であった。私は、中国の四千年の歴史はこの二本建てが中心になっている、これこそは誠に百戦不敗の陣容であると思うのである。しかもそれは決して意識的計画的ではない。理想でもなければ、理窟でもない。これ等のすべてのものを超えて自然にできる一つの陣容である。これを名づけて私は「両辺倒」というのである。

そして今すでに両辺倒の陣容は立派にできている。重ねていう、「向蘇一辺倒」、「向美一辺倒」がそれである。（因みに「蘇」はソ連であり「美」は米国である）。

「両」

## 日本人と中国人と

なぜ中国人と日本人は仲が悪いかについて中国人三人と日本人三人が、戦争中、上海で数日間座談会をひらいたことがある。その結果、両方がたがいにも相手方に対して懐いている最低限の常識を簡条書にして交換しあったところ、日本人の見た中国人は、国家観念がない、不潔である、うそをつく、迷信家である、恩知らずである、利己主義者である、バクチを好む等々であり、中国人の見た日本人は、短気、小胆、陰険でちん坊である、酒を飲むとトラになる、すぐ人をなぐる、外見は厳しいが実はそうでない、理論が浅薄である、大言するが虎頭蛇尾におわる（竜頭蛇尾を中国ではこういう）、子供らしい（一例をあげれば、日本人はむやみに旗を持って歩くことを好む）等々。両方とも悪口ばかりで、これではケンカするほかになかった。

ところで、日本人が一口にケンカといっていることの内容だが、中国人はこれを四段

階に分けて考える。戦前、上海で人力車に乗った日本人が、五十銭渡そうとすると、車夫は一円くれという。こんなに時間がかかって、こんなに汗をかいたのだから、一円の値打があると車夫が主張すると、わしは時計を見ていた、そんなに時間がかかっていから五十銭でよいと日本人もやりかえす。こんな場合中国人は小さい声でやれず大きい声でやかましくいたてる。この段階を上海語で哇啦々々というが、これが日本語のケンカにあたる。街頭で大声でやられると日本人は体裁が悪いので相手の要求通り支払ってすますこともあるが、いきなりこの辺で「馬鹿」という言葉が日本人の口から飛び出すことも少なくない。この「馬鹿」という旧日本軍隊の愛用語は戦争中すいぶん中国でもはやったものだが、ここでもし裁判したとなると、「馬鹿」と先に云った日本人の方が負けだ。なぜなら、おたがいに理のある主張をしあっている哇啦々々の段階で「馬鹿」というのは理を飛び越えたのしりであって、ひとたび「馬鹿」が出ればすでに相罵（悪罵）の第二段階にはいったこととなるからだ。相手をののしるとなると、中国語のスラングは実に豊富で、ここでそれを並べれば風俗壊乱になる恐れがあるほどだ。握りこぶしを上向けて相手の鼻下へ突き出しながら一しきりののしると、また一方が同じことをやり返す。しかし、この段階ではまだ決して相手の体にふれない。外交上

日本人と中国人と

の威嚇であるためだが、ここでも日本人は一段階先に飛び出してポカリとなぐってしまふ。するとこれは第三段階の打相打にはいったことになり、さらに相手を殺傷するに到れば殺人の最終段階になる訳だ。

中国の古字で佞と書いてまことという。人の口から出る言葉にはうそはないという意味で、こういう言葉を生んだ中国人は大体にうそをつかない人間である。ただ、いかに正直な中国人でも必ずうそをつく場所がある。それは役所へいった時にかぎる。警察、裁判所、税務署ではきつとうそをつく。宿屋や船の一等室を「官房」「官艙」といい、役人が来るとここへ案内して歓待する。これを見て中国人は官尊民卑だと日本人は考えるが、それは当たっていない。役人が来れば百年目だと観念して、これを官祭することにより彼らの権力からくる禍をさけようとするのである。それほど中国の役所は不正であり、官吏は汚吏であった。

私は上海で三十年間本屋を営んで貸売りをやり、かなり大きな取引額にのぼったのだが、決算してみると、貸売りで中国人から受けた欠損は三十年間にわずか五万円ばかりにすぎなかった。神田の古本屋の一年間の万引代にも当らない。「中国人に倒されたことはまずありませんが、日本人にやられましたね」というのが引揚者の、これだけは必

ず一致する言葉であるのを聞くと、アジアの道をゆくこの同行二人はもっと相手を理解しあう必要があるだろう。

〔両〕

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## スガ眼がくせ者

今頃は守備軍と市民代表との間に千変万化の秘術をつくしての外交々渉が行われている筈だ、

イヤ三千本だ、二万本だてネ！

とはAさんの言葉だった。その頃上海では蔣総統が湯恩伯大将に対して上海死守を厳命した時であった。そして間もなく死守する筈の国民政府軍は一方の活路呉淞から乗船して容易に台湾に向って悠々と出帆との電報があつて、またも共産軍は上海に無血入城したとのことであつた。その電報を見ながらAさんは「五千本かな一万本——かな？ 二週間頑張ったんだから一万本せしめたかも知れないなあ——」と妙な計算をしていた。解る人には解るだろう。Aさんはよく云つた。「日本人は鳥の網を四方に張るが中国人はいつでも三方しか張らないヨ」と。実にうまいことを云つたものだ。呉淞だけはチャ

ント開けておったよ。「上海の民衆は皆んな共産主義者になったのだろうか」と誰かが云うと、Aさんは、

「ベラボーめ、みんな共産主義になるかって、ようものを考えて見い、そりゃ共産軍が勝って入城するのだからその鼻先へ青天白日旗なんか出す奴は居ませんよ、憚りながら国民革命軍が入城する時にゃ青天白日旗だ、日本軍が入城する時にゃ日の丸の旗と東洋人好来西々々々だ、共産軍が入城するのだから出る旗はみんな紅旗だよ、四千年の歴史は見栄や伊達じゃござんせん、中国人のポケットは大きいんだよ、ユニオンジャックでも星条旗でもどんな旗でもお出でなさいだ、しかし皆さん御心配御無用ですぞ、吾々中国人は断じてソ聯の手先になる者じゃない。」

と。それでよいのだ、吾等はその言葉を信じて安心してよいのである。

「日本人は北伐軍の時に何といったか、北伐軍の戦争は従来戦争とは違ってる、従来は軍閥政権の取り合いだったが今度の戦争は軍閥の手から中国人の手に取り戻すためのものだ、後ろにはソ聯がついている。（その頃はボロジンとかガロンとかソ聯の顧問も居ったよ）。そこで張作霖や孫伝芳や呉佩孚の後ろには英国がついていると烙印をおした様なことを云っておったが、やがてボロジンやガロンがハウハウの態で中国

スガ眼がくせ者

を脱出した時の顔が見たかったよ、日本人のだよ。それから何年たったか、二十年かそこらだよ。また中国共産軍はソ連の傀儡でございと、馬鹿も休み休み云うてくれ、中共軍に一体、一本のソ聯式小銃でも来てるかよ、吾々共産軍の新装備はことごとくこれ国民政府軍が寝返る時のお土産じゃないか、憚りながら中共軍は江西省瑞金に始めて中華ソヴェット政府を作って以来、もう三十年になりますよ、そして三十年間のうらと遊んでたんじゃありませんよ、西北二万マイルの大行軍だけでも買っておくんせえだ。」

とBさん得意の長講だ。それでいいんだよその通りだよネBさん。

「海に千年山に千年ついでに沙漠にも千年と合せて三千年の中国民族は、チャント先刻御存じであります、政治というものは今日まで完全であったことがない、そこに易世革命という奴がいるんだよ、易世革命というのは一種の進化思想なんだよ、一度よりは二度、二度よりは三度とネ、だんだん少しずつ善くなるのだよ、頭のとっぺんからぶらぶらさせていた長い奴をチョコキンチョコキンと切った弁髪革命、国民革命というのは天足革命というんだよ、とにかく千年来婦人の足を括ってさ、女を皆んなヒステリーにしておった。そのため中国人の家庭は地獄の観があったんだよ、それが纏足まかりならんと

いうお声がかかりで天足になったのサ、地獄だった家庭が楽園に方向転換したよ、女のヒステリーが少くなっただよ、しかしそんな奏効は知らずにいるよ、そして旗印の三民主義はとうとう公約不履行さ、その中に八本のタコの脚の先から腐り始めて、その腐りがとうとうどう腹にまで上って来た。遂に、国民政府は腐ってるといわれる様になった、共産軍が強いよりも国民軍の崩れるのが早いんだよ、そして遂に天下は共産軍へ廻り持ちになって来たんだ、今日あることは三年前よりチャンと解っていたんだよ、しかしだよ、その共産軍も断じて油断はならん、何ととっても人が足らん、その人の足らん時に手伝わせるその手伝い人がくせ物だよ、しかもその手伝い人が甚だ多いことがネー、悪貨は良貨を駆逐するってネー、共産軍がどんなに完全な理想を掲げた処で理想がそのまま実現するなんてことはないことだよ、もしも理想がその通りに実現するものだったら、メエテルリンクは世界的文学者にはならなかった筈サ、青い鳥は捕えた時には黄色であったり桃色であったり、時には真黒でさえあったのだ、中国民衆はそれを知ってるんだよ、そして如何にも共産軍に双手を挙げて賛成したり中には黨員にまでなった人間でも実は何時でも片眼では共産政府のやり方を見てるんだよ、スガ眼をしてネー、だから全上海が紅旗で歓迎した、共産軍が発行してる人民銀行券というお札が

スガ眼がくせ者

だ、十万円のG円札を一元で引換えたその人民銀行券が六月の五日よりは八日が、八日より十六日がより安くなるのだよ、これがその上海民衆なんだ、上海の経済力という厄介者なんだよ、十二分に注意せよ、ならんのはこれだよ、アッハッハッハ、油断はならんよ、上海民衆てえのはなあ——」

〔西〕

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 不敗の方法

ばくちとは、お金をかけて勝った者が取り、負けた者が損をすることである。ばくちとは勝つか負けるかの勝負である。その方法に一から六までの印をつけたサイを使う関係から一六勝負とも言う。また偶数を丁目と言い奇数を半目と言って、それによって勝負を争うこともある、だからばくちのことを丁目とも言う。つまり勝つか負けるかの二本道でお金をかけて争う行為を、大体ばくちと言うのである。そこで同じ様に売ると買うとの二本道で、儲けるか損するか相場をも、吾々の間では大きなばくちと考える様になったらしい。丁目と半目とはって、丁と出るか半と出るかで勝つか負けるかするの**がばくち**であるということから、私はお百姓さんも大きな**ばくち**をしているとよく言う。それは稲を植えても麦作しても、ながい日数をかけて豊作か不作かを一つに天候にかけるのだから私は農作も**ばくち**だと言うのであるが、しかし農作は丁目や相場の様に

危険率は多くはない。

明治維新以後の戦争、日清戦争日露戦争なども、私にはやはり国をかけてのばくちであったと思われるのである。幸いにも両役は勝ったが、その勝ったことによって全国民を大きな錯覚に追い込んだ。全国民が戦争に対しては無批判に政府に追従するほどの好戦国民となってしまうたのである。（日本人は戦争だけでなく何事にも政府や天皇の名に於いてやる事は、すべて無批判に追従するようである）。その事については私はノートに書いていることがある。

## 政府と人民

一つの国にその中心となる政府のあることは誰でも知っている。（わが日本に於いては天皇中心である）。その政府の法律命令が人民によってよく遵守されるとその国はよく治った国と言われる。だから政府（日本では天皇）と人民とが一つになって居る程度は、その国の政治の程度であるときえも言えないことはない。政府が東へといえ国民が全部東へ、西へといえ西へという風になれば、それこそ模範国民であると考えたのは、日本人の単純さであるかも知れぬ。もちろん平時に於いては是非そうなくてはなら

ぬ、政府の方針に誤りがなければ、それもよからう、しかしほんとうはそれではいけない。それは甚だ封建的である。あらゆることは必ず表裏がある。そこで一つ政府が何か考えて発案する。(日本では天皇の名に於いてであることもある)。その時全国民が無批判に賛成してはならない。一面は賛成する人もあるが、同時に必ず一面、反対が現われなくてはならない。その当否は後のこととして、一度は必ず反対すべきである。その反対説を取りあげて両面を比較研究するところに、妥当なる解決点の発見があるのである。この賛否二本建ての安全性を採用したのが、今日の議會制度である。それ故に、議會では全く自由討議をさせることになつて居る。しかもなお、一院でなく二院制まで採用してあるのは、より以上万全を期してのことである。政府(天皇に於いても)も神様でないのだからまた必ず時に誤りがある。その誤りを正しゅうする。それが議會の仕事である。政府の言うことは何でも国民がそのまま追従するのなら、議會制度なんて不要なものだ。然るに日本に於いては、天皇(政府は天皇の役人である)の言われたことには、批判が許されないことになつて居る。それでずるい政府は、時々議會の賛否を避けて天皇の勅命を使うことがある。勅令がそれである。一度出た勅令はあとで議會はただ賛成する丈である。政府当局の考えが正しいなら問題はないが、日本軍閥の様な(かつ

不敗の方法

ての)人々が政府を握ると、遂に二院制度まで翼賛議会ということにして全く骨抜きにして終った。天皇を擁して全くの専制を行ったのである。これには無論、議会にも責任があるが、根本的には日本国民全部が好戦国民になって居ったと言うことになる。日本国民は人間の幸福は戦争に勝つことによってのみ来るということを肯定して居たのである。

この錯覚を(少数の正しい人々を押し切って)利用して軍閥は野心を遂げんとした。それに国民もまたうまうまと引きずられて追従したのである。そして自然に日本全国をかけてばくちを打った。

中国人はそこへ行くと、決して国をかけてのばくちは打たない。多年の経験がさせないのだ。中日戦争が甚だ危険になって来ると、自然に両建てが出来る。重慶の抗戦政府に危機が来た。すると甚だ容易に反対の和平論者が現われて敵国を通じて(これが即ち反間苦肉の策というものである)南京に和平政府が出来た。これで天秤はかかったのである。昔から各国の歴史を見るなら、戦争に国をかけた国は必ず滅んで居る。中国が独り五千年の歴史をもって不滅を誇っているのは、国をかけたばくちを打たないところにあるのだ。現在の国共の内戦、また米ソの世界的危機に際して、いつとはなしにチャン

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

と二つの政府が出来て再び天秤はかかっている。  
中国は国をかけてばくちは打たないのである。  
中国人の聡明な多年の経験が、それをさせないのである。

〔両〕

## 理解の難しさ

われわれ日本人は「絶対に無い場合でなければ無い」といわない。一つでもあれば、あるんだ、無いとはいわさん」と理屈をいう。

中国人は沢山ある場合にあるといい、一つや二つあってもあるとはいわない。

ある時、桃の木をかこんで日本人の子供と中国人の子供とが何かやがやとさわいでいた。私は通りかかって足を止めた。そして子供たちのさわぎを聞いて見た。私が黙って聞いているのを見つけた日本人の子供は、はずかしそうに、何かいいかけた口をつぐんでしまったので、私は声をかけた。

何をいってるのかネ。

すると一人の日本人の子供が、あのネ、今この桃の木に桃の実があるか無いかというたんだよ。するとネ、中国人の方は無いというし、僕等はあるというたんだ。それは

ネ、あの上の一つあるからあるというてるの、すると、中国人はたった一つじゃないかというんだよ。だから僕は一つでもあればあるんだ、無いのではないというてるんだよ。

とさわぎの内容を話してくれた。そこで私は、

ああそうか、それは面白いネー、小父さんにいわせると君達というてることはほんとうだ。そして中国人のいうてることもほんとうだ。

といってやったところが、日本人の子ども中国人の子ども不思議そうな顔をしているので、さらに私はそれを説明してやった。

君たち日本人は今、君のいうてる様に、一つでもあればある、一つでも無いのでなければ無いとはいわない習慣で、だから君のいうてることは間違いないのだ。ところが中国人達は、沢山ある時にあるというて、大体に無くなってる様な時には無いという習慣なんだよ。だからこんなにつしが残っていない様な時には無いというてしまうのだよ。だから君達のいうてるのも間違っではないのだよ。

と中国人の子供の方についてやったら、日本人の方は不思議そうな顔をしておったが、中国人の子供たちはスグに、

理解の難しさ

うんそうだよ。小父さんよく知ってるネ、とほめてくれたことがあった。私は念のため日本人の子供たちに、

君たち、今私のいうたことはわからないだろう。それが、日本人の君たちと中国人のあの子供たちとの考え方の違いというものだ、君たちもつと大きくなったら必ず解る。大人の言葉でいうと、あんなに一つ残っているようなのを除外例的存在というんだよ。

といって私は別れた。すると子供たちもそれきり、議論を止めて仲好くつれだって、歩いて行つた。私は、風俗習慣を異にする外国人との理解が如何に困難であるかをしみじみと見せつけられたような気がした。

〔兩〕

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 外交の妙

前にもちょっと書いたが、中国人の喧嘩にはチャンと段階があつて、第一は哇啦哇啦（上海語）というて実はこの段階だけが日本でいう喧嘩である。つまり騒がしいとか声高にしゃべり合うとか、まず口喧嘩までのことである。それから進展して相罵になる。この時はお互いに悪口のいい合いである。つまり馬鹿とか猪糞とかのいい合いであるが、哇啦々々から相罵にはいる時に裁判すると、先に悪罵を放った方が負けになる。何故かと言うと普通の言葉では言うことが出来なくなった。つまりいうことに詰ったゆえ悪罵を放つことになるので、先に放った方が負けということになるのだ。私共が注意しなければならぬことは、論戦ということの限界である。論戦は悪罵を放つた時に一線を引く、実に巧妙なものである。さらに進むとこの相罵の間にいろいろのゼスチュアが行われる。

SAMPLE  
Shosha-suisui.com

外交の妙

中国人の悪罵となると、その語の意味は説明も出来ないような猛烈さで、その猛烈な悪罵を遠慮なく浴びせるのである。そしてそのうえ両腕をまくり、両脚を踏みしめ遂に両の拳骨を相手の鼻先にまで突き出して威嚇する。その時の顔の様子を見てみると、今にもなぐり合うかのようなのであるが、決してなぐらない。

ここにわれわれの学ばねばならぬことは、この段階までは外交の段階であるということである。外交の段階においては哇啦々々もよろしい、どんな威嚇もよろしいが、決してなぐってはならないのである。一度なぐったら最後、外交の一線を越えるのである。

中国人にはその限界が充分に意識されている。そこで今にもなぐりそうに見えるが、決してなぐらない。それはわれわれには歯がゆいほどのもどかしさも感じせしめる。そして大体この段階において仲裁者が現われて（魯仲人という）仲裁々判的解決がされる。われわれがこの歯がゆくもどかしく思うところに、われわれが外交ということを知らないといわれる原因がある。

日本人の外交は、強硬になる頃にはすでに戦争を決定しているのである。だから戦争をするための強硬外交ということになる。これは中国人の外交からいうと反対である。外交は戦争にならぬようにするための外交である。私は、それは中国に限らないと思

う。各国の外交はことごとく戦争になりそうなことを戦争にならせないようにする、それが外交の中心目標であるように思うのである。この点日本人は考え違いをしている。

競技というものも日本人はまるで戦争と考えて、勝つとか負けることばかりに目標をおいている。私はこの前非常に愉快に見た新聞記事があった。われわれがその記事を見ると両方の国の間は今にも戦争になるのではないかと思われるまでに外交の主張がとがっている。その時一方から「平和の用意あり」と切り出す（平和攻勢とか呼ばれたものだ）と、それで昨日までのとがった言論が急におだやかになる。

しかしまたしても双方の強い主張が尖锐になって、今にも始まるのではないかと思うようなことになった時に、一方から「大統領の会談に応じる用意あり」というふうなことがいわれる。すると相手方の方から「わが方にも会談の用意あり」というふうになって、ここに再び外交はおだやかになる。そして何だ彼んだといううちに、外相とか国防長官とかいわれるような人を交替させるのである。

私が帰国前に度々聞かれたことは「上海で見て第三次大戦はどう考えられるか」ということであつた。私はなかなか戦争になるものではないと答えて来た。今日でもなお私は急に戦争になるとは思わない。それはいずれも外交ということを間違ひなく了解して

外交の妙

いる国々であるからである。

中国人が相罵の間に使う言葉と、威嚇するあの動作、あれをわれわれ日本人は充分に了解する必要がある。あれが外交というものである。そして外交の間に和解する――それが外交の勝利であり外交の成功といえるものなのだ。

〔西〕

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com